

33 英国医史における学と職と

法制的考察(その二)

栗本宗治

本学会前回において、イングランド一六世紀ヘンリ八世メデカル・アクト一五二二年と勅許一五一八年とによるロイアル・コレジ・オブ・フィジシャンズ・オブ・ロンドンの創設は欧州大陸との関係において、僧職・法職改革を背景として近代医職の礎となったこと、一八世紀病院新設のなか、病院医診療職制がライデンとの関係においてベッドサイド・ティーチングが始められ、病院診療の不文律として今日に至ることを述べた。

背景に科学革命(バタフィールド)・産業革命(アシュト)があった。

一五〇五年、ロイアル・コレジ・オブ・サージヨンス・オブ・エディンバラの創立はアバディンなどスコットランド四大学(タウンユニバーシテイ)とともに、チャーチにつながる大学コレジ(オクスブリジ)とは異なるもの

があること、スコットランド一八世紀の学の高揚は産業革命をリードしたことは注目される。

なお一八世紀イングランドにはオクスフォードのブラクストンのコモンロー講座、ギボンのローマ帝国興亡史、ジョンソンの英語辞典があった。ジャーナリズムの芽ばえがあった。

一八〇〇年、ロイアル・コレジ・オブ・サージヨンス・オブ・ロンドンはりんカンズ・イン(法職コレジのひとつ)隣接の地に組織された。ジョン・ハンターの影響は大きい。一八〇五年、ロイアル・ソサアティ・オブ・メディシン(臨床医学分科学会をもって構成)創立、今日に至る。英国医師会ジャーナル、ランセット誌他発刊。ロンドン大学組織一八二五。パブリックの概念。

そして一八五八年、メデイカル・アクトの改正、すなわちゼネラル・メデイカル・カウンシルを設置して医師登録を行う、医教育の責任をもつ、登録資格を大学学位と医職メデイカル・コレジのディプローマとする。東京慈恵会創始の高木父子はMRC SとLRCPをもった。

一八八〇年代コンサルタント・フィジシャンズ議論があ

った。

二〇世紀、ヘルス・インシュランス（ベバリッジレポート、一九四二）、大戦後国民パブリックのヘルス・サービス（白書一九四四、アクト一九四六、施行一九四八）。一九六六年ロイアル・コレジ・オブ・ゼネラル・プラクティシヨナー設立、医職プロフェシヨンの差は法制的に解消した。

ヘルス・サービス施行五〇年を機に改善への改革が進められてきた。メディカル・アクト改正一九八三年、ゼネラル・メディカル・カウンシル・レポート「明日の医師」一九八三年、政府レポートカルマン報告一九八三年、例えばカリキュラムに医の法・倫理を入れること、コンサルタントになるに要する期間を短縮すること、そして医のヒューマニティの教育、医療関係者の業務分担の見直し、とくに診療看護関係の改善を急務とする。

以上、近代英国医の制度改革リフォームとして次があげられる、一六世紀メディカル・アクト、一八世紀病院医職制、一九世紀ゼネラル・メディカル・カウンシル、二〇世紀ナショナル・ヘルス・サービス施行と改革。

ハーベイの学は二〇世紀クリニカル・サイエンス”をへて実施に達した。英国ヒポクラテスと呼ばれるシデナムの医は、一九世紀シデナム協会設立をへて今なおヒポクラテス理解に近づこうとする。イタリヤ・ルネサンスの医の制度は職のコレジとして、学のコレジとの両輪関係を英国において定着をみた。今欧州との協調を求めて改革は進められる。

（大阪医科大学）